〝機器は補助手段〟

コンピューターシステム導入を提案

―近く団交開き追及―

七月一日、会社は組合に対し、保安設備を増強するためにコンピュータシステムによる、保安情報処理装置および在坑者掌握システムを設置したいと申し入れ、その概要について説明しました。

① 保安情報処理装置

導入の目的は、坑内の環境と設備を総括的に監視するとともに、緊急時には状況を正確に把握し、的確・迅速な避難誘導、応急処置などの指示を行いやすくする補助手段になるとし、導入の時期は今年度から二カ年計画で各鉱別に設置するとしています。

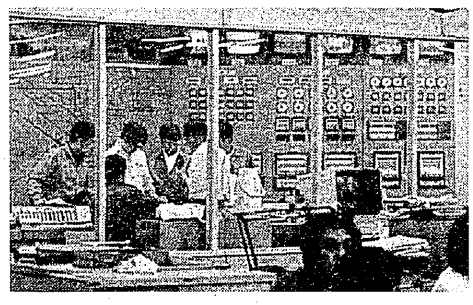
② 在坑者掌握システム

現行の在坑者掌握方法は、就業日報と安全灯貸し出し札での確認であり、これでは事故発生の場合時間がかかり混乱するので、走査用磁気カードによってコンピュータに記憶させ掌握したいとし、盆休みに設置し、教育期間をおいて十月一日から実施したいとしています。

①の場合、あくまで保安の補助装置であり、基本は人による巡回、点検、監視体制の強化であるという点から、通気検定員、BC当番などの保安作業員を縮小しないこと。さらにセンサーを人のいない所にも設置することや、研究・開発の促進などが必要です。

②の場合、災害発生に伴う事後処理であり、災害発生を防ぐ具体策が必要です。さらに現場での人員掌握、入・昇坑時の混乱、従来の諸取り扱いとの関連、労務管理の問題など解明されなければなりません。

組合としては、近く団交を申し入れ追及することにしています。



最新鋭といわれた南大夕張礦のコンピュータシステム。だが、災害は起こった。

あほ・だら

芝岡久友衛

保安

今、掘進切羽が危ない

掘進切羽での施枠については再三指摘されることだが、施枠時の天井当たり付けが依然として不十分であり、枠脚の立ち前、迫り前が悪い。

水付き個所である四山鉱の本層関係では、三つ組枠の枠脚の底板（溶接付けした鉄板）をはずしたり、上層関係の半岩盤掘進個所では、三つ組枠の枠脚をマイトで切ったりしている（断面が裂けた状態になる）。

また、半岩盤掘進では、倒枠防止対策のための枠の締め付け、当たり付けなどを確実に実施しないために、発破のさいに枠を倒したり、枠が動いたりしている。

最近では、倒枠防止のために二回に分けて発破をするようになったが、これなどは良いことである。

しかし、一日の作業課程（ノルマ）に追われるためか、発破後五分間の待機はほとんどといってよいぐらいしなくなったし、脚釜の発破のときなどは発破の母線をちぢめて（固定母線を使わない）近距離から打ったりしている。

このように、一つひとつの保安対策の手を抜いて、確実に実施されないならば、いつかは重大災害をまねく結果になることを警告しておかなければならない。

（一分会職場新聞『きずな』七月二十七日発行、第百十一号から）

使用せず……が第一

COマスクが新型に

万一の災害発生に備えて、現在SR―30型のCOマスクを携帯していますが、ことほどSR―50型が導入され、期限切れの分から逐次交換されています。

新しいCOマスクは、旧型に比較して性能が改善されていますが、主な点は

① ろ煙能力が七〇%であったものが八〇%に。

② 有効時間で六〇分（CO濃度〇・三%～一%）が九〇分（〇・二五%～一・五%）に。

③ 吸気温度で六五度（CO濃度一%）が九〇度（一・五%）。注、この場合は前者は一・五%だと九五度になる。

などです。なお外見的には形が若干変わった程度で重さもほぼ同じですが、着装が頭に掛けるようになったのが旧型と異なる点です。

COマスクは、あくまで緊急事態のさいの避難、脱出用のものであり、実際には使用しないで済むことが第一です。昭和三十八年の大災害のときには、このマスクさえなく多数の人がCO患者になりました。マスクがどんなに改善されても、災害が起これば犠牲者が出ます。あくまで災害を起こさない、起こさせないということが最大の課題です。

なお、使用法については保安会で説明されます。

左が新しいCOマスク

着装したところ

坑内便所使用へ

前号既報の坑内便所は七月二十九日から使用可能となりました。設置箇所に問題がありますが、一度試してみて下さい。

仲間の声

新労組の役員選挙で

七月初旬に、新労組の組合役員選挙があったが、四山では、支部長候補と教宣部長候補にそれぞれ対立候補の噂があり、大きな話題になった。

いざ選挙になるという時点では、どこでどのようになったのか、ついに対立候補がないままに終わってしまった。

職場での話しでは、組合や会社が根まわしをして動いたことによって、対立候補の予定者が次々に立候補を断念したとか？　職場では「組合役選に会社が介入してくるのはおかしい」「組合の選挙ぐらいは自由にさせてほしい」などの声が聞かれた。

対立候補がない場合でも、信任投票をしてこそ、真の組合民主主義があると言われるのではないでしょうか？

（一分会職場新聞『きずな』七月二十七日発行、第百十一号から）

あれから三十五年

私と三池闘争

木下八郎

千二百人の首切り合理化当時をいまだに鮮明に思い出す。首になった人、残った人。資本の汚ない残酷な攻撃だった。

私も残る自信はなかったが、幸か不幸か紙一重で残ったといえる。『俺の名前は、折目のところにあってわからんじゃったつじゃろ』なんて話をしたものだった。

それだけに、他人事ではなかった。どこの職場をみても、懸命に世話してくれた正副分会長は首になっていた。私の職場には四十人いたが十人も首を切られた。

ここから三百十三日の首切り反対闘争である。職制による組織の切り崩しで、労働者同士の憎しみのるつぼと化した。

分裂……昨日の友は今日の敵である。兄弟、親子の争いまで発展した家庭もあった。兄は首になり、弟は首切りを認めた新労に走り『他人が反対して頑張ってくれているのに……』と兄弟喧嘩。夜中にまで職制を通じての説得。

私の場合も、入社の際の保証人である職制の従兄から『お前は会社に頼んで外してもらった』と言われ、私は即座に『俺のかわりに首になった人がいるのなら、その分まで頑張る』と言うと、『お前は馬鹿か』と言われたことを思い出す。しかし、従兄の息子は三池労組に残った。首切りを撤回させることができず終止符が打たれたが、敗北感はなかった。

そして就労。採炭工の私たちは高温多湿の排気道に配役され、炭じんにまみれての重労働の上に賃金も大幅にダウンするという差別攻撃の毎日でした。

分裂前の払採炭工の賃金形態は、払長一人が十・五と少し多く、他の人はみんな平等に支払われていたが、分裂後は上は十一から下は八という六ランクの合建で、新労優先の差別分配を強行して競争させ、生産第一の労働強化に追い込んだ。私たちはこれに対し、徹底した保安優先のたたかいを組んだ。

しかし、増産の陰で労働災害が頻発しだした。私の職場では十五年間も重大災害を見なかったのに、落盤や鉱車、機械に巻き込まれるなどの常識では考えられないような事故で、組織の別を問わず、多くの仲間の命が奪われていった。

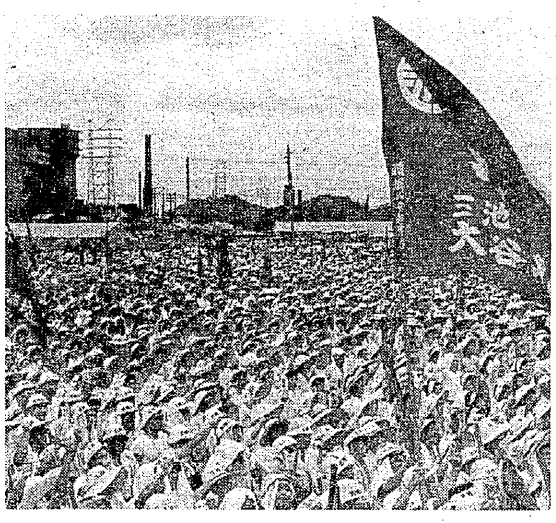
それに加えて国中を驚かした三川鉱の炭じん爆発である。死者四百五十八人。CO患者八百三十九人。三井鉱山のあくなき人命無視と利潤追求の犠牲である。

資本主義社会では、泣きを見るのは労働者であり、その家族である。寄らば大樹の陰で新労に走った仲間も良いことばかりはなかった。労働者は団結してたたかわなくては自分の命も守れない。仲間も兄弟も殺されることを教えてくれたのが三池闘争だった。また、その答えが八十三人の犠牲者を出した有明鉱の坑内火災であろう。国家権力と資本の常とう手段は差別による分裂支配であるということを肝に銘じて教えてくれた。

定年退職から六年を過ぎたいま、私は思う……子も孫も、分裂しないで仲間と団結し、仲よく平和な社会で幸せな一生を送れるよう資本や権力にだまされずに頑張ってほしい……と。

× ×

木下さんは、大正十三年四月一日生まれで六十一歳。昭和二十一年八月二十九日に入社、五十四年四月一日定年退職。万田鉱から三川鉱を通じて採炭工一筋。三十九年から中央委員、分会長、さらに大谷地域分会の役員、分会長をつとめました。現在は荒尾市増永一八八の三にお住まいです。



7月17日、全国からの労働者を迎えて三池を守る10万人大集会が開かれた。